

[まとめ]

最後に、底生動物調査、メダカ調査及び魚類調査それぞれの結果に基づいた価値区分と保全対象地域選定結果を水生動物全体としてまとめた。図9-11に価値区分をランクC及びDとした場合の保全対象4地域を示した。選定理由は以下の通りである。

(1) メッシュNo66、65、64、63を中心とした地域。釣川本流の田久橋から東郷橋辺りまでの流程、山田川中流部、及びこれらの河川周辺の水田地帯となる。ランクCとした理由はこの地域が、宗像におけるニッポンバラタナゴ及びメダカの生息場所の中心の一つであることによる。ニッポンバラタナゴは、1970年代後半から1980年代中頃の圃場整備やその後の土地開発により、一時絶滅に近い状況にあったものが、最近回復して来ている状況にある。メダカについては、同様の理由により生息域が急速に狭くなっているが、かなりの個体数が生息している。

その他の理由として、この地域の釣川は魚類、山田川は魚類及び底生動物の多様性がみられること、多くの市民が集まる場所でもあることなどがあげられる。

(2) メッシュNo10、11、12、01、02を中心とした地域をランクCとした。

釣川河口近辺で合流する新川及び樽見川の流程とその周辺の水田地帯。二次性淡水魚で本来汽水域近くに生息するメダカの宗像における最終生息地であり、この地域の生息条件が失われると宗像のメダカは急速に減少していくことが予測される。現在、過密状況になっているのも問題である。

その他、樽見川については、これまで調査が十分行われているとは言えず、宗像における汽水域の水生生物を知るための貴重な地域の一つであることが理由としてあげられる。

(3) メッシュNo30、40、50を中心とした釣川本流の最上流部近辺をランクDとした。

宗像全域に広がる釣川水系の中心となる本流の最上流は、その河川のあり様を決める最も重要な地域である。現在、生物学的水質が α s～ β mにあり、貧腐水性の底生動物の多様性も比較的高い。同じ地域の、水系の最上位の猿田川の荒廃が目立ってきている状況にある。

(4) メッシュNo13、14、15、04を中心とした、釣川水系最大の支流である朝町川から分かれる綿打川、子下し川、大穂川の上流部を含む地域をランクDとした。これらの支流は、 α s～ β mの底生動物が多く出現し、また釣川水系唯一のタカハヤ及び2型あると思われるヨシノボリの生息地でもある。朝町川本流の上流部が、急速に水生動物が貧弱になっている現状では、釣川水系全体の水生動物の多様性を保つ上でも重要な地域である。

(5) 重要な地域としてはあげないが、水生動物の生息状況より上記4地域に準じた地域をあげておく。その理由は、釣川水系全体の水生動物の多様性を保全していくためには欠かすことの出来ない地域であると判断されるからである。

①メッシュNo06、95、96を中心とした山田川の最上流部及びその周辺の地域。

②メッシュNo24、13、14を中心とした樽見川の上流部及びその周辺の地域。

③メッシュNo69、79を中心とした宮川の流域とその周辺の地域。